

グリム兄弟の „Kinder- und Hausmärchen“

における援助者について — 2 —

今 田 淳

„Kinder- und Hausmärchen“ に収められた 206 の話の中で、民話における援助者とよぶのに相応しい援助者が登場するのは 34 の話である。その援助者を分類してみると、『小びと又は一寸ぼうし』、『老婆又は神通力をもつ女』、『恩をうけた動物』、『魔法にかけられている人物』、その他『単独の例で分類しがたいもの』ということになる。『小びと、一寸ぼうし』が係わる話が、13, 28, 64, 91, 97, 113, 165 番の七話、『老婆又は神通力をもつ女』が関係するのが、9, 122, 130, 133, 179, 181, 186 番の七話、『恩をうけた動物』の報恩という形式になっている話が、17, 60, 62, 107, 191 番の五つ、『魔法にかけられている人物』が援助者になっているものが、57, 63, 96, 106, 127, 136, 193 番の七話、『分類しがたい人』が援助者になっているのが、14, 29, 126, 134, 188 番の五話、『人以外のもの』が、21, 88, 166 番の三話である。援助をうける主人公についてみると、三人兄弟の末弟というのが、57, 62, 63, 64, 91, 97, 165, 191 番の八つの話、二人兄弟の弟の方というのが、28, 60 番の二話、三人姉妹の末の妹というのが、88, 113 番の二つの話、兄二人をもつ妹というのが 96 番の話であり、その他は分類のしようがないものである。主として三人兄弟（又は姉妹）の末の弟（又は妹）が援助をうけるというのが民話によく使われているモチーフといわれているが、34 話中の 13 という数字は果たしてそれを裏付けているのであろうか、それとも未だ不十分な数なのであろうか。尚、上に挙げた十三の話（28, 60 番の二つは二人兄弟だが）以外に、21 番と 130 番の二つの話に三人姉妹が登場している。21 番の話で援助をうけるのは多分最年少の娘だと思われるが、彼女の姉達は実の姉ではない異母姉であるし、130 番の方は一つ目、二つ目、三つ目の三姉妹のうち、いわゆる異常のない真ん中の二つ目が、それ故に母、姉、妹にいじめられるという話であって、いずれも最も弱い立場にあるという点では、末の弟や末の妹と通じるところがあるが、形態的にはこの二つの話は全く異質のものであるといえるのかもしれない。援助者による分類にしたがって、この論文

では『小びと又は一寸ぼうし』、『老婆又は神通力をもつ女』、『恩をうけた動物』が援助者になっている話について検討してみることにする。

先ず、『小びと』、『一寸ぼうし』が援助者として登場する七つの話についてだが、三人兄弟の末の弟を援助するのが 64, 91, 165 番の三つで、これらの話では『抜作』、『阿呆のハンス』(der Dummling, der dumme Hans) といわれていた三番目の弟が、『小びと』、『一寸ぼうし』の援助で難題を片付け王女と結婚する。三人兄弟の末の王子を援助するのが 97 番、三人姉妹の末の王女を援助するのが 113 番の物語で、援助をうけた主人公はそれぞれ王女、王子と結ばれる。その他、13 番は継母とその娘にいじめられている継子の娘、28 番は二人兄弟の弟が援助をうけるという話である。64. Die goldene Gans (黄金のがちょう)。森へ木を伐りに出かけた兄二人が、「あなたの袋のなかのお菓子を、ひとかけくださいな、あなたのぶどう酒を、ひと口飲ませてくださいな。おなかはぺこぺこ、のどはからからで、やりきれやしない」という『ねずみ色をした一寸ぼうし』(ein altes graues Männlein) の頼みを、「わしのもってる菓子や酒をおまえにくれてやっちまやあ、かんじんの自分のがなくなる。さあ、^と退いた、どいた!」、「おまえにやれば、かんじんの自分のものがなくなるわけだ。さあ、退いた、どいた!」と冷たく断って、結局ケガをして帰ることになるのに対して、『抜作』(der Dummling) といわれて人にばかにされていた末の弟は、「だが、おいらのもってるのあ、灰やきの菓子と、すっぱいビールぎりだぜ。こんなもんでよけりゃあ、そこいらへすわって、ふたりで食うことにしよう」とこたえる。「あなたは感心な人だ、じぶんの物を、よろこんで他人^{ひと}にわけてくんなさる、だから、あたしはあなたに福をさずけてあげる。あすこに老木が一本ありますね、あの木をきりたおしてみなせえ、根のあいだに何かへえってますよ」といわれて、『抜作』は「純金の羽毛をもったがちょう」を手に入れるわけだが、その羽毛を盗もうとした旅宿の娘三人、あとからくっついてきた牧師、寺男、百姓二人をぞろぞろひきつれている恰好があまりに可笑しく、「もしもだれかお姫さまを笑わせるものがあつたら、おひめさまをその人のおよめさんにやる」といわれていたお姫さまを笑わせることになる。このような物語のつねで、王さまはすぐに約束を果たそうとはせずに、「地下室にいっぱいつまってるぶどう酒を飲みほせる男をつれてこなくちゃだめだ」、「パンの山をべろりとたいらげる男をつれてこなくてはだめだ」、「^{おか}陸でも水の上でも、どちらでも走れる舟がいりようだ」と次々に難題をだす。その都度『ねずみ色をした一寸ぼうし』が援助してくれて、終には『抜作』もお姫さまと結婚し、王さまが亡くなったあとは自ら王さまになって幸せに世をおくるのである。

彼岸的な人物である『ねずみ色をした一寸ぼうし』は、主人公の優しさに報いて贈物をし、主人公が必要とする瞬間に現われてその課題を解決してやり、援助者としての役割を終えるとまた消えてしまう。マックス・リュティのえがきあげた『民話における援助者』のイメージにぴったりである。難題の中身が「飲むこと」、「食べること」、「交通手段」というのはいかにも庶民的である。飲みきれないほど飲んで、食べきれないほど食べて、陸でも水の上でも廻り道せずに進んでいけたらいいのに、という庶民の切実な願いが底にあるような気がしてならない。

91. *Das Erdmännchen* (地もぐり一寸ぼうし) では、「どこのだれでもかまわない、お姫さまをつれかえってくれる者にはおひめさまを一人およめさんにやる」というお布告をきいて、三人兄弟の獵人が探しにでかけ、不思議に人のみえない御殿について、そこを根城にしてお姫さまを探すことにする。一人が留守番をして二人が探しに行くことになるが、最初に留守番をした長兄も次の日に留守番をした次兄も、『ちいさな小さなこびと』 (*en klein klein Männchen*) にひどい目にあわされる。しかし二人ともそのことを末弟の『阿呆のハンス』 (*der dumme Hans*) には一言もいわない。三日目に留守番をしている末の弟のところにも『ちいっほけなこびと』が現われて同じようにふるまうが、逆に袋だたきにされる。『こびと』は「もうやめてくれえ、やめてくれえ、かんべんしてくれえ、かんべんしてくれりゃ、おまえに王さまのお姫さまがたのいるところを教えてやるよう」とよびかけ、末の弟にお姫さまのいるところ、その救い出し方、ついでに兄二人が正直でないことも教える。末の弟は深い井戸から王女たちを救い出すが、自分は結局井戸の中におきざりにされて、兄二人が三人の王女の救出者として王さまのところへいく。末の弟は笛が一つ壁にかかっているのを見付けてそれを吹く。すると『地もぐり一寸ぼうしども』 (*so viele Erdmännchens*) がぞろぞろ現われ、その助けで末の弟は地上に出て、城にいて最後には三番目のお姫さまと結ばれ、兄二人は首をつられる。この話では、最初の『ちいっほけなこびと』は援助者として現われたわけではないし、主人公も一応好意は示すがその後で『こびと』をいためつけている。しかし結局は『こびと』は主人公が課題を解決するための援助をすることになるし、深い井戸におきざりにされた主人公を救い出してやるのも、その仲間の『地もぐり一寸ぼうしども』である。登場の仕方そのものは、少くとも主人公に対しては、援助者らしくないが、演じている役割は当に援助者としてのそれである。165. *Der Vogel Greif* (怪鳥グライフ) では、「おひめさまが食べるとじょうぶになるというそのくだもの (林檎によく似ているある木の実) をもってきた者は、おひめさまをおよめさんにして、それから王さまになれる」という

お布告をきいたどこやらのお百姓が、そうりょうむすこと次男にりんごを持っていかせるが、二人は途中で出会った『鉄のような色をした小さなこびと』(chlis isigs Manndle) の、「そのかごのなかになにがはいってる?」という問に、「かえるの肢だよ」、「靴刷毛だよ」とこたえたために、「そうかね、そんなものになっていなよ」といわれて、本当に「かえるの肢」と「靴刷毛」になってしまって御殿から追いかえされる。『頓ちきハンス』(der dumm Hans) といわれている末っ子は、出会った『鉄のような色の、つんつるてんの着物をきた小さなこびと』(chlis mutzigs Manndle) に、「りんごだよ、これを食べると王さまのおひめさまがじょぶになるんだ」と正直にこたえ、その結果『こびと』の助力でおひめさまの病気はなおる。ところが王さまは、「お姫さまがほしければ、そのまえに、水の中とおんなじように、からからの^{わか}陸の上をはしる船をこしらえなくてはいけない」という。ここでも兄二人は同じ失敗を繰返し、ハンスは『こびと』の援助で課題解決に成功する。王さまは更に、「朝早くから晩おそくまで、兎百羽の番をしなくてはいけない、それで、もし一羽でもいなくなったら、お姫さまはもらえないぞ」と新たな課題を出す。この課題はハンスだけが背負うことになり、兄二人はもはや登場しない。ハンスは『こびと』の援助で勿論この難題も片付けるわけだが、この課題は主人公ハンスと援助者『こびと』が係わる三つ目のしかも最後の課題になっていて、このあと『こびと』は消えてしまって二度と現われない。しかし話はまだ続く。王さまはハンスに「怪鳥^{ばけどり}グライフの羽根を一まいもってこなければだめだ」というのである。ハンスはすぐに出かけていき、途中泊めてもらった二つの城の殿さまとごけらい、更に渡し守から、「じつは、金庫のかぎをなくして当惑いたしおる、恐縮だが、どこにあるか、ひとつたずねてみてくださらんか」、「こちらの姫ぎみが御病気で、いくら手をつくしても、さっぱりしるしがない、おそれいますが、どうしたらもとのおからだにもどるか、ばけどりにきいていただきたい」、「なんで、おいらひとりか、来るやつも来るやつも、みんな川越しをさせてやらにゃならんのだか、きいてみしてくれや」と頼まれて、怪鳥グライフのすみかにつく。グライフは留守でそのおかみさんにあらいざらい話すと、こんどはそのおかみさんの助力で自らの課題を解決できたうえに、頼まれた三つのこともその解決の仕方を聞きだしてもらって帰っていく。二つのお城では、お礼に「黄金白銀^{こがねしろがね}は言うにおよばず、当人のほしいというものはなんでも」、「金庫の中にあつた金貨を、しこたまハンスにやったうえ、牝牛だの、羊だの、山羊だの、いろいろのものもたせて」やる。最初の王さまは自分も宝物をもらおうと出かけていき、渡し守のいた川で土左衛門になり、ハンスはお姫さ

まと結婚して王さまになる。話の前半に登場する『こびと』は典型的な援助者である。話の後半になると『こびと』はもはや全然現われなくなるとお課題があり、意外な援助者『怪鳥グライフのおかみさん』(d' Frau vom Vogelgrif)が登場するが、或いは元来二つあった物語が一つのものになったのかもしれない。97. Das Wasser des Lebens (命の水)では、病気の王さまを救う「命の水」を三人の王子が探しに行く。途中『一寸ぼうし』(ein Zwerg)が路に立っていて、「どこへ行く、そんなに急いで？」とたずねたのに、長兄は「一寸ぼうしのほかやろう、どこへ行こうと、おおきにおせわだ」とこたえ、「こびとは怒って、王子がひどい目にあうようにいりました。王子は、それから間もなく山あいの細路^{ほそみち}へはいりこんで、行けば行くほど、山と山とのあいだは狭くなるばかり、しまいには、もう一步も前へ出られないくらいに路がせまくなって、馬の向きをかえることもできず、鞍からおりることもできず、まるで閉じこめられたようになり」、二番目の王子も兄と同じような対応をし、「一寸ぼうしは王子を呪いました。それで、この王子も、お兄さんとおんなじように山と山とのあいだへはまりこんで、前^{まき}へも後^{あと}へも行かれなく」なる。ところが『いちばん年下の王子』(der jüngste)は、「ぼくは、命の水というものをさがしに行きます。父が大病で、いまにもなくなりそうなのですから」と正直にこたえる。『一寸ぼうし』は「あなたは、腹ぐろい兄さんたちみたいにやたらに威張りちらさず、ちゃんと礼儀をわきまえていなさるから、あなたには、命の水のあるところへ行くみちを教えてあげます」といって、更にもその水を手に入れるのに必要な道具も与え、その使い方を教える。無事「命の水」を手に入れて帰る途中また『一寸ぼうし』に出会う。『一寸ぼうし』は、王子が「命の水」と一緒に持ってきた「剣とパン」について、「この剣をつかえば、あなたは敵の軍勢を一人のこらず討ちたいらげることができるし、また、このパンはね、いくら食べても皆無^{みんな}にならないやつですよ」という。王子は『一寸ぼうし』に頼んで兄二人を助けてもらうが、その時「あの人たちにゆだんをしちゃいけませんよ、あれは腹ぐろい人たちだ」と忠告されたのに、油断して「命の水」を「海水」ととりかえられてしまい、「海水」を父王に飲ませることになる。兄二人の「弟はおとうさまを毒殺するつもりだったので、わたくしどもこそ、ほんとうの命の水をもってまいったのです」との言を信じた王さまは、末の王子を人知れず射ち殺すことにする。その役をになったかりゅうどに命だけは助けてもらった王子は、森の奥へ奥へとはいって行く。帰る途中に「剣とパン」を使って難儀を救ってあげていた三つの国の王さまから、お礼の黄金と宝石が届けられ、王さまも「してみると、せがれは罪がなかったのかな」と考えるようになり、王

子も最後には「命の水」のあったお城のお姫さまと結ばれて父王のもとへ帰り、兄二人は逃走する。ここでは『一寸ぼうし』は、自分を無視し高慢な兄二人にはその報いに厳しい罰を与え、正直な末の王子には善意の援助をしているのである。

113. De beiden Künigeskinner (王さまの子どもふたり) は、「大男の王さま」のとりこになった王子が、「わしは、娘を三人もっておる、そのうちのいちばん年長^{とし}のを、きさまは夜どおし寝ずの番をいたせ、宵の九時から朝の六時までじゃ。時刻^{とき}の鐘の鳴るたびごとに、わしが、自身きさまのとこへ出向いてきさまを呼ぶぞ、そのとき、きさまがわしに返答をしなければ、明日は、きさまの命はないものとおもえ。もしも、きさまがその都度わしに受けこたえをいたすならば、娘をきさまの女房にくれてつかわずぞ」、「今夜はわしの次女のところで不寝^ねの番をせにゃならん、そうしたら、きさまがわしの長女を女房にする資格があるかどうか、ひとつ考えてみようぞ」、「今晚はいちばん年したの娘のところで夜番をせにゃならん。それがすんだなら、きさまがわしの二番めの娘を女房にできるかどうか、とっくり考えてみようぞ」と命がけの課題を与えられるが、それぞれのお姫さまが自分の部屋の「クリストッフエルの石像」に、「おとうさまがおたずねになったらね、この王子さまのかわりにおへんじをしてあげてちょうだいね」と代役を頼んで無事きりぬける。するとこんどは、「わしは大きな森をもつとる。この森の木を、きさまが今朝の六時から今夜の六時までに根こそぎ伐りたおしてしもうたなら、わしもそのことを、じっくり考えてみることにする」、「わしはな、大きな池をもっておる。きさま、明日の朝そこへ行って、池を深^{ふか}って鏡のようにぴかぴかにする、それで、魚という魚が、なんでもかでもその中におるようにするのじゃぞ」、「王さまは大きな山をもっていました。山には茨ばかりおいしげっていました。これをのこらず刈りとして、大きな御殿をたてるのですが、それも、これよりもりっぱなのは人間には考えられないというくらいのものであり、また、御殿についてるものはなんでもかでも備わってはいけなくてはいけない」、という難題を三つ課される。王子は途方に暮れてしまうが、『末のお姫さま』(de jüngste Königsdochter) が王子を眠らせたあとで、「アルウェゲルスや、出ておいで！」と、『地もぐり一寸ぼうしたち』(viele Eerdmänkens) を喚びだして、その援助で三つとも課題を片付けて王子の命を救う。王さまが、「すえの娘は、姉ふたりがかたづかないうちは、どうあってもくれてやるわけにはいかん」というので、二人は連れだって逃げだす。追いかけた王さまにつかまりそうになると、お姫さまの魔法で「茨のやぶと薔薇」、「教会堂と牧師」に変身して難をのがれ、三度目にはお姫さまの魔法を看破っているお妃さまが追いかけるが、やはり二人を

つかまえることはできない。そこでお姫さまは、「おまえが、とんでもないめにあって二進も三進もいかなかったときには、これでどうにかなるよ」と、お姫さまに胡桃を三つやる。二人は無事王子の御殿の近くにやってきて、「おまえはここにいておくれ、わたしが、まず館へ行って、それから、馬車とけらいどもをつれておまえをむかえにくるからね」となるのだが、この形式の話では「母親の接吻」といったようなちょっとしたことが、王子にそれまでのことをすべて忘れさせ、話は新たな展開をみせる。お姫さまのことをすっかり忘れてしまった王子が別のお嫁さんをもらうことになり、いよいよその婚礼の式という時に、主人公は胡桃の中から立派な衣裳をとりだし、それを着て花嫁の前に現われる。その衣裳を欲しがらる花嫁に、「今夜王子のおへやの戸の外に寝かせていただければ、さしあげてもよろしゅうございます」とこたえて、主人公は自分が難題をかかえて困っていた王子を助けたことを泣きながら語るが、花嫁の命をうけた家来に「催眠薬」を飲まされている王子にはきこえない。翌日は更に立派な衣裳を使う。王子はこんどは「目をさませている薬」を飲まされていて、主人公の話を書きいて何もかも思い出して、二人は終に結ばれるのである。この物語のように花嫁の命令で家来が薬を飲ませる話と、花嫁自身が飲ませる話があり、また王子が目をさませているのは三晩目という話もあるが、いずれ大同小異である。この物語では、『アルウェゲルス』(Arweggers)とよばれる『地もぐり一寸ぼうし』が、お姫さまの家来のような性格ではあるが、援助者としての役割を演じている。援助されるべく課題をかかえているのは王子であり、その意味ではお姫さまを主人公としてよいのか些か不確かだけど、『アルウェゲルス』が直接関係するのは『末のお姫さま』であって、王子の方は眠っていてその存在すら知らないし、胡桃の係わる話ではお姫さまが主人公になっているので、物語全体の主人公も一応三人姉妹の末の姫ということにしておいた。この話を除く他の四つの話では、最も弱い立場にあって皆に馬鹿にされている三人兄弟の末の弟が、正直にふるまうことで『小びと』、『一寸ぼうし』という援助者をえて難題を解決し、幸せになるのである。正直で素直な者しか援助しない、というのが援助者としての『小びと』、『一寸ぼうし』に共通した特徴のようで、ここでとりあげて論じなかった 13. Die drei Männlein im Walde (森のなかの三人一寸ぼうし)、28. Der singende Knochen (唄をうたう骨)の話で援助をうける主人公も、おとなしくて親切な『継娘』であり、邪気がなく神さまのおぼしめしにかなっている『弟』なのである。またもう一つ大きな特徴は、主人公が最後には王女か王子と結ばれるということである。主人公が兄に殺されてしまう 28 番の話を外にして、他の六つの話では、『小びと

又は一寸ぼうし』に援助された主人公は、たとえそれが素性のわからない『どこやらのお百姓』の息子であっても、最後には王女と結婚して王さまになるのである。

『老婆又は神通力をもつ女』が援助者として登場するのが七話であるが、130番以外では『神通力をもつ女』(eine weise Frau, die weise Frau)も『老婆』(eine alte Frau, die gute Alte)というふうになっている。その意味では『神通力をもつ老婆』としてしまった方がいいのかもしれないが、一応別々にしてその両者ということにしておく。130番は主人公が三人姉妹の真ん中の娘ということでも例外的な物語である。民話全体の中で三人兄弟又は姉妹の真ん中が主人公として援助をうけるというのが例外であるうえに、援助者として『老婆又は神通力をもつ女』が登場する物語の中でも例外なのである。即ち、122, 133, 179, 181, 186番の物語が脇役のない主人公が援助をうける形式であり、9番は十二人の兄をもつ末の妹ではありながら、援助者と出会う時には独りきりになっている主人公で、複数の登場人物の中から援助される対象として一人が選ばれるという形式は、このグループでは130番の話だけなのである。七つの物語のうちで、主人公が男であるのが、122番、133番、179番の三つ、娘というのが130番、186番の二つ、狩人の妻が主人公になっているのが181番、十二人の兄をもつ妹姫を主人公にしているのが9番の話である。133. Die zertanzten Schuhe (おどりぬいてぼろぼろになる靴)は、ケガをして任に耐えなくなった『気の毒な兵隊』(ein armer Soldat)が、「どこのだれでもかまわない、夜の夜なかにお姫さまがたのダンスをする現場を見つけたものは、そのなかの一人をよりどって自分のおよめさんにして、王さまが亡くなった後はその人を王さまにしてやる、もっとも、わたくしがやりましようともうしでておいて、三日三晩たっても嗅ぎつけられないものは命をとられるのだぞ」とお布告をだしている王さまの都へいく途中で、『どこかのおばあさん』(eine alte Frau)に出会う。「おまえさん、どこへ行きなさる」とたずねられて、冗談半分に「それはね、あの評判のおひめさまがたが、どこでダンスをやって靴をはきつぶすのだから、そいつをさぐりだしてな、それから、おいらが王さまになってみたいとは思わないこともないんだがね」とこたえると、『おばあさん』は、「おまえさん、夜になってでてくるぶどう酒を飲んででは、だめだよ、それからね、しょうたいなく寝こんだような真似をしなくっちゃいけないよ」と忠告をしたうえで、「これをはおるとね、おまえさんの姿が見えなくなる、だから、十二人のあとから、こっそりついて行けるわね」といいながら、ちいさな(つりがねマントのような)合羽をわたす。『おばあさん』の忠告どおりによ

るまって、お姫さまたちのうしろからついていき、ダンスの相手とその場所を見定め、証拠の品物として最初の夜は途中の並木道に生えていた銀の葉、黄金の葉、ダイヤモンドの葉のしげっている枝を一本ずつ、三晩目にはお姫さまたちが使っていたさかずきを一つもってかえる。「わしの十二人の姫たちは、夜ふん、どこで舞踏をいたして靴をこわすのか」との王さまの質問には、「舞踏のおあいては十二人の王子さまがた。場所は地の下の御殿」とこたえて、証拠の品々をとりだしてみせる。一番年長のお姫さまと結婚し、行く行くは王さまになるという約束ができて話は終る。「例の王子たちのほうは、みんなが十二人のお姫さまがたを相手に舞踏をした夜の数だけ、その日かずだけ、魔法のとりこになっている日が延びることになりました」という、舞踏の相手をしていた王子たちが、そもそものような由来で、なぜ魔法のとりこになったのか、どうすれば救い出せるのか等々、物語そのものには不明な点もあって不完全な印象は拭えないが、主人公に課題の解決の仕方を教え、贈物までしているこの『どこかのおばあさん』は紛れもない援助者である。179. Die Gänsehirtin am Brunnen (泉のそばのがちょう番の女)では、『うつくしい若い男の人』(ein hübscher junger Mann, 伯爵の息子)が森の中で、「あのおばあさんには気をつけなよ、ゆだんも隙もなりゃしないぞ、あれはまほうつかいだよ」といわれている『石みたように(ばかばかしく)としをとった婆さま』(ein steinaltes Mütterchen)に会う。伯爵の息子は『ばあさま』を気の毒に思ってその荷物をもってやることにする。道のりは遠く、荷物は思ったよりはるかに重いうえ、途中から『ばあさま』まで背負うことになって、苦しみ苦しみ何とかその家につくと、そこには「がんじょうな大きな女ですが、その醜いことは夜のようにです」という、がちょう番の女がいる。『ばあさま』は、「おまえにはずいぶんつらいおもいをさせたが、それでも、命には別条なかった。いま、ほねおり賃をあげる、おまえはお銭やなんかは要らないんだから、べつの物をあげることにする」といって、「翠玉をくりぬいてこしらえた小篋」を一つ握らせ、「だいじにもっているんだよ、おまえに福をもってくるよ」とつけくわえる。伯爵の息子はそこを立ち去り、一番可愛がっていた末の姫を誤解から追いだしてしまい、今ではそのことで悲嘆に暮れている王さまとお妃さまがいる都につき、小篋をお妃さまにわたす。その小篋には真珠が一粒はいつているが、その真珠が、「娘は、雪のように白く、りんごの花のように赤く、かみの毛は日の光のようにかがやいておりました。この娘が泣くたびごとに目から落ちますのは、ただの涙ではなく、真珠や、いろいろの宝石ばかりでございました」という、その末のお姫さまの目から流れおちたものと同じ真珠で、お姫さまと『ばあさま』がつなが

る。最後には、がちょう番の醜い女が実はその美しいお姫さまということになり、伯爵の息子とお姫さまは結ばれて幸せにくらすのである。『ばあさま』は伯爵の息子である『うつくしい若い男の人』だけでなく、お姫さまも助けているのだが、『ばあさま』とお姫さまは一緒に暮らしているのだし、いわゆる援助者としての作用は伯爵の息子に対してだけ及んでいると考えて構うまい。森の中で伯爵の息子に出会うその形式も当に援助者としてのそれである。一方お姫さまとの係わりは、「おまえは、三年まえの今日、あたしのとこへ来たのだが、おぼえているかい、おまえのここにいられる時期は、おしまいになったのだよ、あたしたちは、もう、いっしょにいるわけにはいかないのさ」、「おまえがたも、今じぶん、えっちらおっちら、こんな遠みちをしなくてもすんだのにねえ、三年前に、あんな善人で、あんなかわいらしい自分たちの娘を無理やりに追んだしさえしなかったらさ。娘さんはどうもしていないよ、三年間がちょうの番をしなければならなかったけど、わるいことは、なにひとつおぼえず、心は、むかしのとおりにきれいなものさ」でも明らかのように、いわゆる援助者と主人公との出会いから援助までの関係とはいいがたいものがある。「この娘には、あたしがね、これがおまえがたを慕って泣きためた涙をやる、この娘のなみだは、真珠ばかりだよ、海でみつかるのよりも美しいもの、おまえの王国ぜんたいよりもねうちがあるものだよ、それからね、この娘はよくつとめてくれたから、そのお礼に、ばばあのちいさな家をあげるよ」といいのこして、『ばあさま』がみんなの目の前からかき消すようにいなくなると、「いままでのちいっばけな家は、いつのまにか、きらびやかな御殿にかわっていた」というのであるから、この『石みたようにとしをとった婆さま』が、特異な能力をもった魔法を使う人物であることはまちがいないが、この物語では珍しく援助者としての『神通力をもつ女』と魔女とのちがいを語っているのである、「ひとは、あのばあさまを魔女とおもっていますが、そうではなく、あれは、人のためをはかってくれる神通力をもった女であったということ、これだけはたしかです」。

122. Der Krautesel (キャベツろば) では、けだものを待ちぶせに森へ出かけた『年のわかいかりゅうど』(ein junger Jäger) が、そこで出会った『みっともない顔をしたお婆さん』(ein altes häßliches Mütterchen) に親切にし、実は『神通力をもつ女』(die weise Frau) であったその『おばあさん』がそれに報いてやるのである、「おまえさんは感心な人だから、そのお礼にばばあが、いい物をあげる。かまわず、ずんずん歩いておいで。そのうちに、ある木のところへでるがね、その木に鳥が九羽とまっていて、一枚の合羽をつかんで我れがちに取りっこしてる、それを見たら、おまえさん、鉄砲でねらいをつけて、鳥のあつまってるまん中の

とこを撃つのだよ、合羽は、鳥どもがおとすし、鳥も一羽、弾丸^{たま}にあたって、死んで落ちてくる。合羽は、おまえさんのものにするがいい、それは願かけのかなう合羽でな、それを肩にはおって、どこそこへ行きたいもんじゃと願をかけさえすりゃあ、目ばたきするうちにもうそこへ行ってしまふのさ。死んだ鳥はな、心の臓をえぐりだして、まるごと鶉のみにしてしまいな、そうするとな、毎朝毎朝、おまえさんが起きるたびに、枕の下で金貨が一つずつひろえるのだよ。「ばかにうまいものがもらえるそうだが、そのとおりにいってくれるといいがなあ」と思っていると、本当にそのとおりになり、やがて「うちにいたのでは、この金貨もなんの役にたつ？ 旅に出て世界見物をしてやれ」と主人公は旅に出かける。魔女とその美しい娘に出会い、一度は魔女に宝物を奪われるが、それを食べたなら「ろばになるキャベツ」と「人間にもどるキャベツ」のおかげで宝物をとりもどし、魔女は死なせてその美しい娘と結ばれて、死ぬまで楽しく暮らすのである。「今日は！ かりゅうどさん、おまえさんは陽気で屈託がなさそうだねえ、あたしゃ、おなかはぺこぺこ、のどはからからさ、なにかほどこしておくれでないか」と声をかけられて、かりゅうどは「おばあさんが気の毒になって、かくしへ手をつっこんで、分相応にほどこし」をする。『みっともない顔をしたお婆さん』でも意に介さないで示すその優しさが、援助者たる『神通力をもつ女』の意に適い、その援助をうけて幸せをつかむのである。主人公は元来なんらかの課題をもっていたわけではなく、贈物も従って与えられた課題を解決するために使われているのではない。ただ、贈物ももらった『年のわかかりゅうど』が、民話の主人公らしく旅に出てその結果幸せになるというところは、主人公として援助者をえるに十分資格をそなえていると思うし、『神通力をもつ女』の方は、主人公との出会いから贈物をするところまで援助者に相応しいふるまいをしていると思うのである。130. Einäuglein, Zweiäuglein und Dreiäuglein (一つ目、二つ目、三つ目)。「目だまを二つくっつけてるなんて、おまえは下種^{げす}とおんなじだ、おまえなんか、あたしたちのなかまじゃないよ」と、母親、姉、妹にいじめられて、「なにしろ、姉さんや妹が、ほんのおまじないほどこしか食べものをやらないものですから、いつものとおりに、おなかは、ぺこぺこ」の『二つ目』(Zweiäuglein)が、野原で山羊の番をしながら泣いていると、『女の人』(eine Frau)が一人現れて、実は『神通力をもつこの女の人』(die weise Frau)は、山羊を使ってごちそうが食べられるようにしてくれる、「これからはもう、おまえのおなかのへることがないようにね、おばさんが、いいことを教えてあげる。おまえ、なんでもかまわないから、おまえのつれてる山羊にね、

「こやぎ、メーとなけ!

おぜんや、したく!」

と言ってごらん。そうすると、こざっぱりと布^{きれ}のかかったちいさなお膳が、おまえの前へでてくる、その上にはとびきり上等のごちそうがならんでいて、いくらでも食べほうだい。それから、おまえが、おなかをはって、おぜんに用がなくなったら、

「こやぎ、メーとなけ!

おぜんや、ひっこめ!」

と言えばいい、おぜんはおまえの目から消えてなくなるのさ」。そのうちにそのことが見付かって母親に山羊を殺されて泣いていると、また『神通力をもった女』が現れて、「二つ目、おばさんが、いいこと教えてあげる。おまえのきょうだいにたのんで、殺された山羊の臓腑^{はらわた}をもらってね、それを、入口の前の地べたへうずめてごらん。おまえ、運がよくなるよ」といつてかき消すようにいなくなる。翌朝になるとそこにはきらびやかな木が一本生えていて、その木には銀の葉がおいしげり、黄金の実がなっている。通りかかった若い美しい殿さまが、「このみごとな木は、たれのものか。わしにこれを一枝くれる者があれば、謝礼としてなんなりと所望^{のぞみ}のものをつかわそうぞ」というが、その枝を折って渡せるのは二つ目だけで、結局二つ目は美しい殿さまと結ばれて幸せになる。この話でも、主人公である二つ目には何らの解決すべき課題もない。しかし、親や姉妹にいじめられて、食べるものもろくに食べられないでいる主人公が、最後には若い美しい殿さまと結ばれて幸せになるそのための援助になっているのであるから、『神通力をもった女』は十分に援助者といえよう。181. Die Nixe im Teich (池にすむ水の精)。貧しくなった粉ひきが、水の精に「心配おしでない、わたしがね、せんよりもおかねもちに、また運もよくしてあげるわ。そのお礼には、いましがたおまえのうちで生まれたものを、わたしにけると約束しさえすればいいのよ」といわれて、軽率に「どうせ、犬っころか、猫の子にきまつてるだろ」と考えて、生まれた時にやる約束をしてしまったために、かりゅうどになった夫を水の精に奪われた『およめさん』(die arme Frau)が、夫を探しに出かけ疲れて眠りこみ、お告げのような夢を見る。その夢でみたとおりに行動し、『白髪^{しろが}のおばあさん』(eine Alte mit weißen Haaren)の助けで、夫のかりゅうどを水の精が棲んでいる池から救い出す。援助者たる『神通力をもった女』(die weise Frau)が自ら登場するのではなく、先ず夢の中に現われ、その場所を主人公が訪ねて援助者に会うというところが特殊な形式であり、また援助が段階的なもの珍しい。いずれも満

月の夜という設定なのだが、『白髪のおばあさん』は最初は主人公に黄金の櫛を与え、その結果主人公がえるのは「櫛が水の底へとどいたじぶんに、鏡のような水のおもてがわかれて、かりゅうどの頭がにゅうっと出ました。かりゅうどは口をきかず、悲しげな目つきでおよめさんをながめたばかりで、出たとおもったとたんに、二つめの波がおしよせてきて、夫のあたまにおおいかぶさりました」であり、二度目に黄金の笛を使うと「水がわかれて、こんどは頭ばかりではなく、夫が、胴なかの半分のところまで、にゅうっと出てきました。夫はたまりかねて、両腕をおよめさんのほうへひろげたのですが、二番めの波が、ざわざわと押しよせてきて、かりゅうどのあまたへかぶさり、それなりまた下のほうへひきずりこみました」で、三度目の黄金の糸車でやっと「夫のあたまが、夫のからだぜんたいが、によっきりでました。早わざで、夫は岸へとびあがると、およめさんの手をとって、とっとと逃げだしました」となるのである。そのあともう一度はなればなれになって、最後に見知らぬ者どうしと思っていた羊飼の男女が、男が吹く二度目の贈物の笛の音でお互いをみとめあって幸せになるというのである。

9. Die zwölf Brüder (十二人兄弟)。自分が生まれることで十二人の兄を追放することになってしまった『お姫さま』(eine Königstochter)が、兄達を探すために独りで旅に出て、魔法のかかっている小さな家で兄達に会う。しかし、お兄さん達にあげようとして庭に生えていた十二本の草花を折ったら、そのとたんにお兄さん達は鴉になって飛び去ってしまい、その家も消えてしまう。お姫さまが独りぼっちで森の中にいると、『おばあさん』(eine alte Frau)が一人わきに立っていて、「まあ、おまえ、なにをしたのだえ？ あの十二本の白い花を、なぜ、あのままにしておかなかったの？ あれは、おまえの兄さんたちだった。もうこれで、兄さんたちは、いつまでたっても鴉になったきりだよ」といって、「たすけるみちは、たった一つあるにはあるけれど、それは、むずかしくてね、おまえには、そんなことして兄さんたちを救いだすことなんかできやしないよ。やるとなればね、おまえは、七年のあいだ啞でいなきやならない。口をきいてはいけないし、笑ってもいけない。それで、もしおまえがたった一語でも口をきこうもんなら、いいかい、七年がほんの一時間たりなくってもいけないのだよ、それで、みんな水の泡になっちゃう、それどころか、兄さんたちは、そのたった一語で、殺されてしまうのだよ」と教える。「あたしには、おにいさまがたがきっとおたすけできる」と心に言いかせながら、口もきかず笑いもしないで森の中の高い木の枝に腰をかけて糸をつむいでいて、たまたま狩猟をしていた王さまの目にとまり、結婚して妃になる。王さまの母親が腹ぐるい女で、あることないこと悪口

をいい、王さまもとうとう言いまかされて結局は死刑にするということになるのだが、いざという時にちょうど七年間が過ぎ去っていて、兄さん達の魔法がとけ妹姫も救われて、あとはみんな一緒に仲良く暮らすことになる。援助者が課題を自分で解決してやるのではなく、解決の仕方を教えてやるわけだが、前述の 181. Die Nixe im Teich の場合とはその内容が大きく異なり、試練に耐えることが課題の解決につながるという形式で、これはマックス・リュティのいう意味での「あるいは主人公に厄介事をいくつか背負わせる」にあたるのではないかと思う。厄介事を成就するのに対しては何らの援助もしないのだが、主人公が背負わされる厄介事は、それを成し遂げれば本来の課題も解決するという厄介事なのであり、このような形式で主人公に課題解決の仕方を教えるのも、自ら課題を解決してやるのとならんで援助者がになっている役割の一つである。186. Die wahre Braut (ほんとうのおよめさん) は、継母にいじめられている『娘』(ein Mädchen) が、「ここに、鳥の羽毛はねが十二ポンドある。おまえ、これを羽茎じくからむしるのだよ、今晚これがしあがらなきゃ、おもうさまどやしつけられるものと覚悟しなよ。おまえ、終日いちにちのんべんだらりとしてられると思うのかい？」と、とても出来ない仕事をいいつけられて泣いていると、「安心おし！ いい子だねえ、あたしはね、おまえをどうかしてあげようと思って、やってきたのだよ」といって、『おばあさん』(eine alte Frau) が助けてくれる。三つの課題とその解決の仕方、後半の王子と結ばれるまでの紆余曲折は、113 番の Die beiden Künigeskinner (王さまの子どもふたり) と非常によく似ている。主人公と援助者が異なるだけで、あとは同工異曲といえるものである。

『恩をうけた動物』が恩返しに主人公を援助する話について次に検討してみる。主人公は、62 番と 191 番の話が三人兄弟の末弟、60 番が双生児の弟、17 番は王さまの信任あつい家来、107 番は仕立やである。60 番は双生児の弟の方だけど、兄が失敗する脇役というわけではなく、たまたま弟が主人公になったという感じで、その意味では単独で登場する主人公とも見做しうるものである。それに対して 107 番では、くつやと仕立やのうちで仕立やの方が主人公として選ばれている形式である。62. Die Bienenkönigin (蜂の女王)。冒険を求めて旅に出た兄二人(王子)は、「すさんだ遊びにだらしく身をもちくずして、てんで家へかえってきませんでした」ので、探しに出かけた末の弟『呆助』(der Dummling) が、二人を見付け三人で旅を続ける。途中、兄二人がいじめたり殺そうとした蟻、鴨、蜂を、「動物は、そうっとしときなさい。おにいさんたちが蟻のじゃまをするなんて、ほく、だいきらいだ」、「動物は、そうっとしときなさい。おにいさん

たちが鴨を殺すなんて、ほく、だいきらいだ」、「動物は、そうっとしときなさい。おにいさんたちが蜂を焼きころすなんて、ほく、だいきらいだ」といって弟が守ってやる。魔法にかけられているお城にいくと、石板にやらなければならないことが三つ書いてあり、それがうまく出来ればお城は魔法から解放されることになっている。第一の仕事は、「森の中の苔の下に王さまのお姫さまの真珠が数にして一千つぶだけかくしてある、それをさがしださなくてはならないのですが、もしも日の入り前にただの一粒でもたりなかりものなら、それをさがしたものは石になるというのです」、二番目は、「王さまのお姫さまのお寝室^{ねま}の鍵を海のなかからとってくることです」、三番目の仕事は、「ねむっている三人の王女のなかから、いちばんとしたの、いちばんかわいらしいのをさがしだせというのですが、三人は、どこからどこまですっかりおんなじで、ちがったところは、寝入るまえにめいめいちがった甘いものを食べたということだけでした。いちばん上のはお砂糖のかたまりを一つ、中のはシロップをすこしばかり、末のは蜂蜜を匙に一ぱい食べたのです。兄二人はどちらも最初の仕事で失敗して石になってしまうが、末弟の『呆助』は、「せんに命を助けてやったことのある蟻の王さまが、手下の蟻を五千匹つれてきました、そして、この小さな動物たちは、寄ってたかって、ありったけの真珠を、取ったか見たかにひろいあつめて山に積みあげてしまいました」、「せんに命を救ってやったことのある鴨がなん羽もおよいできて、水にもぐって、海の底からかぎをとってきてくれました」、「せんに火に焼かれようとしたのを救ってやったことのある蜂どもの女王がやってきて、三人の王女の口をなめてみました。そのあげく、女王蜂は蜂蜜をたべた口にとまって動かないので、王子は、それがじぶんのさがす王女だと見当をつけました」と、『蟻の王さま』(der Ameisenkönig)、『鴨』(die Enten)、『女王蜂』(die Bienenkönigin)の援助ですべてをやりとげることができ、その結果魔法もとけて一番かわいい末の姫と結婚してその国を継ぎ、兄二人も救われて上の二人の姫と結ばれる。『恩をうけた動物』が援助者として再登場し、その恩に報いて困っている主人公を助けるという形式の話の中では非常に短いものであるが、この動物たちはその援助の内容に合わせて選ばれた典型的な援助者である。191. Das Meerhäschen (あめふらし)。「お城の中の塔のてっぺんの防塁^{とりで}のすぐ下に、窓の十二ある広間」をもって、「十二の窓は十二方に向って、ここにのぼって見まわせば、お国じゅう、どこでも見わたせる」ので、「地めんの上にあろうが下にあろうが、なんでもかでも見とおし」という王女が、「どうしても王女にみつからないように身体をかくしおおせるものでなければ、王女のおむこさんになる資格はない」、「もしもだれかやっ

てみて、王女に見つけられたら、首をはねられたうえ、その首は、杭にかけてさらしものにされる」というお布告をだしており、「お城の前には、死人の首ののってる杭が、もう九十七本たちならびました。それで、もうながいこと、名のって出る者は一人もありませんでした」というところに、三人兄弟が運だめしにやってくる。兄二人はすぐに見付かって首を刎ねられる。『末の弟』(der jüngste, 珍しく der dumme Hans とか der Dummling と形容されていない) は一日だけ考えるひまをもらい、更に二度までは見付かってもし許してもらおうという約束で種々考えるが、良い知恵もうかんでこないで小銃をもって狩猟に出る。『からす』(ein Rabe) と『大きな魚』(ein großer Fisch) を撃とうとすると、「うってはいけない、きとお礼をいたしますよ」というので見逃がしてやり、びっこをひいていた『狐』(ein Fuchs) を撃つがねらいがはずれる。『狐』は、「そんなことするより、ここへ来て、足の刺でも抜いてくださいな」とよびかけ、刺を抜いたあと殺して皮をはぐつもりでいた主人公に、「逃がしてください、きとお礼をいたしますよ」と頼むので結局逃がしてやる。あくる日、どこへ隠れたらいいか見当がつかないで、先ず『からす』に「わたしは、おまえを生かしておいてあげた。どこへかくれたら王さまのお姫さまに見つからないか、こんどは、ひとつ、わたしに智慧をかしてくれよ」という。『からす』は、「じぶんの巢のなかから卵を一つ取りだすと、それを二つに割ってその中に男を閉じこめ、それから、卵をすっかりもとどおりにして、その上へ自分がおいかぶさったものです」が、結局十一番目の窓で見付かる。『大きな魚』は、「うまいことがあるわい、あなたをな、わしの腹の中へしまいこんであげる」といって、「若者を、がぶりと鵜呑みにして、湖水の底へしずみました」が、それでも最後の十二番目の窓のところで見付かってしまう。三番目の『狐』は、「男をつれて、とある泉へ行ってそのなかへめぐり」、自分は「雑貨のかたわら動物をあきなう露天商人のすがたに化け」、「若者も無理やりに水の中へめぐりこまされて、あめふらしというかたつむりに化け」る。『狐』はあめふらしに化けた主人公『末の弟』を、「この生物がたいそうお気にめした」王女に買いとらせるが、その時「おひめさまが窓のそばへ行くたんびに、いそいでお姫さまの鬢の下へはいこむのですよ」といいきかせる。王女はどうしても末の弟を見付けることができず、約束どおり結婚し、末の弟はその国の王さまになる。『からす』、『大きな魚』は知恵が及ばず結局自分たちは死んでしまい、援助者としては完全ではないが、『狐』は、本当の術を心得た知恵のあるものとして、立派に援助者としての役割を演じきるのである。17. Die weiße Schlange (白へび) では、『信任の厚いごけらい』(ein vertrauter Diener) が、お妃の指輪を盗んだ

と疑われるが、それを食べると動物の言葉がわかるという王さまが食べる白へびを、その日にかぎってどうしても我慢ができずにつまみぐいして、そのおかげで一羽の鴨が指輪を呑みこんでいたことを知って無実を証明し、そのあとで旅に出る。動物の言葉がわかるので、『お魚が三びき』(drei Fische)、「あしのしげみにはさまって、口をぱくぱくやって水をほしがって」、「こうやってれば、のたれ死にするにきまってると言ってなげいている」のを助け、「からだの自由のきかない動物を、人間どものほうでよけてくれるようだといいのだがなあ。それぞれ、このわからずやの馬めが、おもたい蹄で、なさけ容赦もなく、わしのけらいどもをふみつぶすわ」と、『蟻の王さま』(ein Ameisenkönig)がいうのをきいて、馬が蟻をふみつぶさないようにわき路へよけてやり、親に捨てられて、「ぼくたち、ひとりじゃどうすることもできない子どもじゃないの？ じぶんで食べろって言われたって、まだ飛べやしない。ここでおなかがへって、死ぬばかりじゃないか」となきさけんでいる『子がらす』(die jungen Raben)には、自分の馬を殺してその餌にしてやる。更に旅を続けて、「王さまのおひめさまが、おむこさまをさがしてござる。けれども、おひめさまをおよめさんにちょうだいしようとするものは、どこのだれでも、なにかむずかしい仕事をやったのけることにきまっておる。それが首尾ようまいらぬとあれば、そのものの命は、なきものと相成る」というお布告をきき、そのお姫さまの「すばらしい美しさに目がくらんで、じぶんの命にかかわることも忘れ、王さまの御前にまかりでて、おひめさまをちょうだいたしたいと申し」いれる。海の中に投げこまれた「黄金の指輪」は、助けてやった『お魚三びき』がとってきてくれるし、「黍のいっばいはいった袋を十ふくろ」草の中にまきちらされると、『蟻の王さま』がてしたの蟻たちに一粒残らず集めさせてくれる。どこにあるかさえわからない「生命の木の実」は、成長した『子がらす』がもってきてくれて、主人公は難題すべてを解決し、お姫さまと結婚して幸福に暮らすことになる。ここでも援助者になる動物はその援助の内容に合わせて選ばれているし、恩をうけることの多そうなどこにでもいる、弱い動物である。107. Die beiden Wanderer (旅あるきの二人の職人) は、一緒に旅していたくつやから、パンとひきかえに両目をくりぬかれた『仕立や』(ein Schneider) が、再びその目を恵まれて都へいこうとするところで、『栗毛の子馬』(ein braunes Füllen)をつかまえて乗ろうとすると、「あたくしは、まだわかさぎます。しっかりするまで、野ばなしにしといてくださいな。あなたにお礼のできる時節がないもんでない」といわれて放してやる。『こうのとりの』(ein Storch)をつかまえて食べようとする、「わたしは、神さまのお使をする鳥だよ。おまえさんが

わたしの命をとらずにおいてくれば、いつかまた、おまえさんにお礼をすることもあるかもしれないやあね、子鴨をつかまえると『親鴨』(eine alte Ente)が、「だれか、あなたをさらって、あなたの息のねをとめようとしたら、あなたのおっかさんはどんなにおなげきになることでしょうか」というのでやはり放してやり、次いで見つけた蜂蜜も『蜜蜂の女王』(der Weisel)が、「おまえがあたしらの邪魔をしないで、ここをおとなしく立ちのくなら、そのお礼に、いつかそのうちに何かしてあげるよ」というので手をつけない。後になって仕立やがある宮中のおかかえの仕立やになると、同じ日にくつやもその宮中のおかかえになる。気がとがめているくつやは、「あいつがおれにしかえしをしないうちに、こっちで、彼奴のおとし穴を掘ってやらにゃならん」と、ありもしないことを王さまに告げ口して次々と仕立やに難題をふりかける、「王さま、あのしたてやはまことに高慢な人間で、お昔なくなった黄金の冠をもってまいるなどと、だいそれたことを申しおります」、「王さま、したてやめ、またまた慢心いたしまして、王さまのお城ぜんたいを、そのなかのもの残らず、動かせるお道具も、とりつけのものもひっくりかかして、内も外も寸分たがわず(蜂の巣の)蜜蠟で雛型につくりあげてみせるなぞと、とんでもないことをもうしおります」、「王さま、お城のお広庭にはどういたしても噴水のできないことを、したてやめがききこみまして、おひろにわのまんなかにも人の丈ほどの噴水をあげ、しかも、それを水晶のような美しいものにしてみせるなぞと、だいそれたことを申しおります」、「王さま、したてやめ、なかなかもって高慢をやめおろせぬ、このたびは、きゃつめ、きゃつがこうとおもえば、王子さまお一方を王さまのおてもとへ風にもたせてよこすことが成るなぞと、だいそれたことを申しおります」。しかしながら、最初の課題は『親鴨』が、「その冠なら、この池の中へおちて底にころがってますよ。今じきにとってきます」、二番目の課題は『女王蜂』の命をうけた蜂たちが、「王さまのお城へとんで行って、あけはなしの窓からえんりょえしゃくなく飛びこむと、隅から隅まではいまわって、物という物をそれは正確にくわしくしらべあげました。それからみんな飛びかえって、蜜ろうでお城のひながたをこしらえだしましたが、そのはやいこと、お城が目の前に、によきによき、はえるのではないかと思われるくらいでした。それで、日の暮れるころにはもうすっかりできあがり」、三番目の課題はみごとな駒に成長したあの『栗毛の子馬』が仕立やを乗せて、「まっしぐらに都のうちへ駈けこみ、わき目もふらずお城の広庭へのりこみました。広庭を、馬は、いなずまのようなはやさで、ぐるぐるぐると三べんまわって、三度めにぱったりたおれました。そのとたんに、なにか破裂するようなおそろしい音がしたか

とおもうと、広庭のまんなかの地面が、てっぽうだまのように空中へまいあがってお城をとびこし、すぐそのあとから、光りかがやく水の柱が、馬に乗った人ぐらいの高さにふきあがり、最後の「そのほうが、九日のうちに、わしに王子をもってこさすならば、そのほうには、わしの長女を妻としてつかわすが、どうじゃ」という最も不可能と思われた難題も、『こうのとりの』が、「難儀は、わたしが、すくってあげる。もうだいたい久しいこと、わたしは、この都へ赤んぼうをもってきている。一度は、王子の赤ちゃんも、泉のなかから取ってきてもよろしい。うちへかえって、平気な顔をしていなさい。九日めに王さまのお城へ行ってごらん、わたしがでかけて行くからね」と解決してくれて、仕立やお姫さまと結ばれるのである。課題が四つ与えられるのが珍しいが、『こうのとりの』が関係する四番目の課題は、民話の主なる聞き手である子供たちにその援助の内容、更には話そのものを信じさせる効果があるといえよう。この物語でも、最初に恩をきる動物は後の援助の内容を考慮して選ばれているのは確かである。60. Die zwei Brüder (二人兄弟)。「黄金の鳥」の心臓と肝臓を食べて、毎朝枕の下に金貨を一枚ずつさずかることになった双生児の兄弟が、自分が食べるつもりでいた伯父さんの意図がえしで森に捨てられる。獵夫に拾われて立派なかりゅうどに成長した兄弟は遍歴の旅に出る。途中森の中で『兎』(ein alter Hase), 『狐』(ein Fuchs), 『狼』(ein Wolf), 『熊』(ein Bär), 『ライオン』(ein Löwe) を撃とうとするが、その都度「かりゅうどさん、わたしは生かしておいとくれ、かりゅうどさんには、子どもを二ひきあげましょう」といわれて、みんな助けてやる。兄弟が一匹ずつつれて別々に旅を続けることになり、『弟』の方がある国で竜を退治してその国のお姫さまを救う。王さまの約束があってお姫さまと結ばれるはずのところが、疲れて眠りこみ、様子を見にきた腹黒い侍従長に首を刎ねられてしまう。『兎』が、「わたしはあるところの山を知っています、その山に、ある草の根があります、その根を口に入れると、どんな病気でも、どんな怪我でもなおります」という草の根をとってきて、主人公を生かかえらせる。都にいて、五匹の動物をお姫さまへの使者にして、ついには侍従長の悪事をあばき自らお姫さまと結ばれる。双生児の兄との後日譚もあって集中では最も長い物語だが、それゆえか援助者の役割はそれほど鮮明ではなく、弱いものから順に並べられた動物たちの序列も援助者としての働きとは無関係で、草の根をとってきて主人公の生命を再生させる『兎』以外、それほどめざましい援助者としての働きをする動物はいない。他に例がなくて面白いのは、助けた動物自身でなくその子供たちが援助者として登場していることである。